

昭和陸軍の鬼才・石原莞爾について

——その生涯・思想と文献の紹介——

田 中 梓

はじめに

十数年前に、中央公論がその創業八十周年を記念して、「近代日本を創った一〇〇人」と題する特集を連載したことがあった。それは明治以降の政治家、宗教家など各界の代表十人ずつを選んで論評したものであるが、軍人十人のうち、昭和陸軍の代表として、東条英機とともに石原莞爾が選ばれている。また「日本人物史大系」の近代篇に出てくる軍人は、明治の山県有朋、乃木希典を除けば、この石

原一人で、美濃部達吉、近衛文麿らとともに昭和政治史の代表となっている。最近「プレジデント」というビジネス関係の総合雑誌が「参謀本部の研究」を特集したが、とり上げられた昭和の参謀は石原と辻政信だけで、色刷表紙の顔はモルトケ、児玉源太郎と石原の三人であった。

このように陸軍大臣や参謀総長になったわけでもなく、また軍司令官の経験もない一中将の石原が、何故日本の軍史上、あるいは近代政治史上の代表的な人物とみなされているのか。それは、石原が軍人にはめずらしく独自の世界観と戦争理論を持ち、それにもとづき満州に理想国家をつくろうとして、関東軍の一作戦参謀の身でありながら、日本全体を引きずって満州建国にまでもっていったからで

あろう。戦後、極東裁判の検事から「あなたは東条大将と思想的に対立されていたそうですね。」といわれ、「いや、対立などしなかった。私には思想らしきものがあるが、東条に思想などなかった。思想のないものと対立できるわけはない。」と答えたといわれているが、何も東条だけではない、独自の思想や理論を持った軍人は、特に昭和の陸軍ではきわめてまれであった。この意味で、石原はまさに異色の軍人であり、業績のよしあし、人物の好き嫌いは別として、後世に名を残すようになった理由もこんなところにあつたのではなからうか。

この一風変つて面白い、しかも日本の近代政治史上無視できない一軍人、石原莞爾の生涯、思想などの概要を述べるとともに、彼についてのさまざまな文献のうち、主要と思われるものいくつかをとりあげて、簡単な紹介を行つてみたい。

☆生涯☆

軍人としての石原の進路は、普通の軍人と何ら変るところはなかった。しかし、その進路の途中の行動を一つ一つとりあげてみると、もちろん後述の石原理論に裏打ちされ

たものではあるが、一風変つたというより、あるときは軍人の常識を逸脱したようなやり方が多く、それが石原ならではの数々のエピソードを生んでいる。そんなエピソードをつづつて、彼の生涯をたどってみよう。

1、青年将校時代まで

石原は明治二十一年、もと庄内藩士の漢学者で、維新後警察官をしていた石原啓介の次男（十人兄弟の）として、山形県鶴岡市に生まれた。同三十五年九月、仙台陸軍地方幼年学校に入校、第六期生きつての秀才として頭角をあらわした。この時代の有名な話として、図画の写生の宿題で、石原が「便所において我が宝を写す」と題して股間の一物を描いて提出した事件がある。これは図画教官のたび重なる宿題の題材に窮していた同期生一同の悩みを解決してやるという茶目気もある石原一流の考え方からやったものらしいが、職員会議で退校問題にまでなり、石原の才を惜しんだ校長が手柄を一時あずかることで一応解決をみた了一般にいわれている事件である。しかし、同期の友人横山臣平はその著書で、あれは大分誇張された噂で、石原が図画の教官に叱責されて終った程度だといっている。

明治三十八年、地方幼年学校を首席で卒業し、東京の陸

軍中央幼年学校(後の陸士予科に当る)に入校する。ここでも石原は傑出した俊秀であったが、いわゆるガチ勉ではなかった。学校の勉強よりも戦史、政治、思想などの書を読み、同郷の先輩佐藤鉄太郎(後の海軍中将)から教えをうけ、また休日には大隈重信や乃木大将などを訪ねている。四十年六月に卒業、士官候補生として山形の歩兵第三十二連隊に配属され、六ヵ月間の兵営生活を送った。君国のためにすべてを捧げる兵の私心なき真心は神に近いものだ、兵は大事にしなければならぬという石原の考え方は、この時期につちかわれた。

石原が陸軍士官学校に入校したのは、同年十二月、第二十一期生としてであった。石原のひらめき、毒舌、不羈奔放な行動は相変わらずで、学校の勉強は教室と自習室以外では行わず、日曜日や夏休みは図書館で、戦史、社会科学、哲学などを研究し、名士を訪ねては論議に興じた。後に彼がいろいろな学識に通じ、各方面の問題について論争しても負けなかった下地もこの頃つくられたものであろう。四十二年六月陸士卒業時の成績は歩兵科三百五十余名中六位で、恩賜の銀時計は拝受できなかったが、これは奇異な言動により品行点や術科の成績が減点になったためだといわれている。

卒業して山形の三十二連隊に復帰した石原は即日見習士官となった。半年後少尉任官、それと同時に新設の会津若

松の歩兵第六十五連隊に転任となる。連隊は翌四十三年一月、韓国警備のため京畿道の春川に駐屯、石原はそこで連隊旗手をつとめた。二年後会津若松に帰還してからは、旗手を後任にゆずり、中隊付として兵の教育訓練に没頭した。訓練に徹することを隊付将校の使命と信じた石原は朝早くから消灯ラッパまで兵営にあった。毎晩おそく下宿に帰って軍服のまま寝たというのもこの頃のことであり、飲めない石原に再三酒を強いた連隊幹部に「飲まんなら飲まん」と大声でどなったというエピソードもこの頃のものであろう。また日蓮宗に帰依するようになったのもこの時代であった。

若松連隊は新設のため、まだ一人も陸軍大学校入学者を出していなかった。連隊長は連隊の名譽のため、是非合格者を出したいと思ひ、陸士の成績の最もよかった石原に目をつけた。一方、隊務に精勵し、軍人の天職に従って立派な部隊長たんとしていた石原には陸大をうける気などさらさらなかった。しかし連隊長命令でしつじぶ受験することになり、ほとんど受験勉強らしいこともしなかったにもかかわらず、十倍余の難関を一度で突破、大正四年十一月から三年間、第三十期生として陸大で学ぶこととなった。

陸大の主要課目は戦術・戦略と戦史の研究で、特にそれらの大量の宿題は学生たちを大いに悩ませるものであった。しかし、石原はその明せきな頭脳と幼年学校時代から

の研究の蓄積により、ほとんど朝飯前といった感じで宿題を片付けていたといわれている。また教官との研究討論も自信にみちた明快な論旨で、時には教官をたじたじとさせるほどであった。かくて卒業成績は二番で恩賜の軍刀を拝受したが、教官評は「性粗野にして無頓着」だったという。また優等になれたのは、陸大には品行点がないからだと石原自身もいっていたようである。

大正七年十一月陸大を卒業して、再び若松の六十五連隊の隊付に復帰、翌八年四月大尉に進級して中隊長となったが、在職三ヵ月で教育総監部に転出する。しかし総監部もむずかしい石原を使いこなせなかったのか、九ヵ月で中支那派遣隊司令部付に転出させてしまった。この漢口駐在で彼は中国大陸の実情をつぶさに視察するとともに、多年にわたって研究してきた軍事学、戦争理論をまとめるチャンスを得た。また後に満州事変のコンビとなる板垣征四郎少佐と肝胆相照らすようになったのもこのときである。一年五ヵ月でよびもどされ、大正十年七月陸大兵学教官となった。

翌十一年七月、石原はドイツ駐在武官補佐官としてベルリンに留学する。ドイツでの研究の対象は、プロシヤのフリードリッヒ大王とナポレオンの戦史で、その資料の収集と研究に力を傾けた。ドイツ留学時代の有名なエピソードが二つある。一つは、紋付の羽織、はかま、白足袋、草履

ばきで、ベルリン、パリ、ロンドンの市中を闊歩したことである。悪口をいう一部の日本人もいたが、この奇抜さは、彼の言行とともに外人にはかえって評判がよかったという。もう一つは、アメリカの大使館付武官が「日本へ帰国するとき、アメリカを通らないか」といったのに対し、「私がアメリカへ行くのは、アメリカ占領軍司令官のときである」と相手を煙にまいたという話であるが、ともに石原らしいエピソードである。

三年の留学を終え、大正十四年十月陸大教官にもどった石原少佐は、その後三年間、ドイツで研究した古戦史の講義を行った後、中佐で関東軍参謀に転出する。

2、関東軍参謀時代

満州事変といえは関東軍、関東軍といえは石原参謀といわれるほど、この事変と石原とは切っても切れない関係にある。このときの行動こそ彼の生涯で最も特筆に価するものであり、その演じた役割はまさに歴史的といえるものであった。

昭和三年十月石原は関東軍参謀に補せられたが、彼を満州に呼んだのは、例の張作霖爆殺の責任で停職となった河本大作だといわれている。六年九月十八日、柳条溝付近の

満鉄線爆破によって勃発した満州事変の概況については、いろいろな資料がくわしくのべているので、ここでは省略するが、この事変はすべて作戰主任參謀石原中佐の手によって企画演出されたものだというのが通説である。共謀者といわれる板垣高級參謀や特務機關の花谷少佐らはみな石原の台本によって動いた助監督にすぎず、本庄軍司令官や三宅參謀長にいたっては、事後承認を強いられたロボットであった。関東軍を引っぱり、中央の政府や參謀本部を無視した石原の企画による進撃は、中国側の提訴を入れた国際連盟理事会の日本軍撤退要求決議となるが、石原はなおも強引に錦州爆撃を敢行し、外交折衝の余地をなくしてしまつた。

満州事変には起るべき下地は十分にあつた。張学良は満鉄包囲政策をとつて、日本の權益を満州から追い出そうとはかり、また万宝山事件や中村大尉事件のように満州における日本人の生活や人命がおびやかされる事件が相次ぎ、石原の手によらなくても、早晚日本の自衛策として何かが起らざるを得ない状況にあつた。そのような情勢と今は絶対に出てこないというソ連の動向を的確に判断し、練りに練つた計画を一気に実行に移したのが石原だったのである。

石原はそのすじ書どおり、しかも一万余の関東軍を動かして、二十二万の張学良の大軍を破り、在満三十万の日本

人の生命と權益を守つたのであるが、それだけなら戦争上手な軍人としてしか名が残らなかつたであろうし、後に石原のやり方を真似て中国本土に戦争を拡大していった領土拡張の野心をもつた軍人たちと変らなかつたであろう。石原には大きな夢があり、それが満州領有を道德的に裏付けるものとなつていた。すなわち、満州に民族協和の独立国家をつくり、北方ソ連の進出の防波堤にしようということであつた。

石原の目ざしたモデル国家は、その東亞連盟思想にもとづく、日・滿・蒙・韓の五族による王道楽土で、中国からも日本からもコントロールされない完全独立の国であり、この考え方には、在満日本人や一部の満州人の間にかなり共鳴するものがあつた。石原はそのような人びとを中心に、協和会や満州国軍をつくつて、満州国を運営しようと考えた。これらの日本人の中には、「将来もし日滿両国が衝突した場合、日系満州国人は断然満州国側に立つ」とまでいうものもあつた。

こんな考え方に日本政府や陸軍が同調するわけはなかつた。その後石原は、満州国の運営が自分の理想とはほど遠いものになつてゆき、新しい国家づくりの段階では、もう一參謀の思いどおりにはゆかないという巨大な組織の力と自分の考え方の甘さを次第に感ずるようになるのである。翌七年の異動で満州を去るとき、すでに、石原は「今後の

満州国は果して自分の考え通りの五族協和の王道楽土として立派に成育発展するだろうか」と一抹の不安をもちたという。

もう一つ彼が見通しをあやまったのは満州事変をひき起した彼のやり方であった。石原がやったように出先の軍が断乎として立ち上れば、中国の侵略はたやすいと軍部が思うようになった。後に石原の後輩たちが日華事変をひき起し、懸命に不拡大を叫んでひきとどめる石原をふり切つて、無暴な大陸侵略の戦争へと拡大して行つたお手本が石原の満州事変だときかされ、石原はただ慚然とするよりほかなかつたという。石原の理想主義はやはり常識と現実からかけはなれたものであり、満州における彼のやり方は軍事的には成功したが、やはり政治的には幼稚な失敗の連続だつたといわれている。

事変解決後、石原は事変をひき起した責任や数々の越権、下剋上など軍律上の問題について深く反省して辞職願を出したが、みとめられず、七年八月の異動で大佐に進級し、内地へ帰還することとなった。

3、連隊長時代

満州から帰つた石原は、満州事変に関する国際連盟臨時

総会に出席する松岡洋右全権の随員として、昭和七年十月ジュネーブに派遣された。この連盟総会に石原はあまり興味を示さず、ジュネーブでは専ら戦争の文献やナポレオンの古画をあざっていたという。日本の連盟脱退を宣言した松岡全権の一行は翌八年六月帰国した。

八年八月石原は仙台の歩兵第四連隊長に就任する。石原は出身地東北の古い名門連隊に勤務できることを喜び、連隊長将兵もまた令名高い石原の着任を喜んだという。かつて青年将校時代一生部隊長で過したいと陸大受験をしぶつた石原の心境は全く変わらず、当時、「私はできることなら一生連隊長で終りたい。私は兵とともにいることが最も楽しみだ。兵と離れて軍人としての生きがいが無い」とまで語っている。

石原は着任後、訓練第一主義と兵営生活を明朗化することを眼目とした。そのため軍隊特有の形式や細かい規則などに拘泥せず、石原式に実質的な改革をどんどん行つていった。次にあげるいくつかのエピソードは、こういつた石原連隊長独特のやり方を示すものとして興味深い。

先ず石原式は形式的な行事に墮した特命検閲に發揮された。この検閲のため、連日連夜大騒ぎで準備をするのが普通であるが、石原はありのままの連隊を見せようのが本当だといって何の準備もさせなかった。また将校の思想調査の状況を問われたとき、「自分は部下将校を信頼してい

るので、そんなことは調べていない」と検閲使の荒木大将に答えている。検閲の最後の連合演習で、最後の攻撃直前に突然敵の機関銃の出現という状況の急変を告げられたとき、石原は「連隊長戦死、連隊は全滅、皆寝ろ」と叫んでいきなり横になり、並みいる検閲使や統裁官らをびっくりさせた。石原独特の剛直精神のあらわれと生来の茶目気的なせりわざである。

当時、歩兵連隊は十二個中隊に分かれており、入隊する兵は、体格、学力、職業などを考慮して各中隊に配属されていたが、石原はこれを出身地の郡別編成に改めた。それは軍隊の悪弊である私的制裁の一掃と団結の強化という成果をもたらした。こんな制度を採用したのはこの第四連隊だけかもしれない。

石原連隊長は実戦に役立つようきびしい訓練で兵をきたえたが、反面兵に対する思いやりは人一倍深く、兵営生活を明るく楽しいものにすることに努力した。浴場に浄化装置を施して、きれいな湯を一日中あふれさせ、兵がいつでも入浴できるようにしたり、残飯の多いのをみて、専門の調理人を軍属として雇って食事の味をよくしたり、パン食をとり入れた。また兵が洗濯に時間をかけるのは無駄だと考え、師団経理部から洗濯機を搬入させて、洗濯はまとめてするように改めたり、官給品の紛失から起る、いわゆる「員数合わせ」は泥棒を養成するものと、これも師

団の経理部長、兵器部長の承認を得て、紛失の都度代品を支給するようにした。これらのことは兵隊経験者ならみな感嘆する快挙で、すべての連隊長が石原のようであったなら、軍隊ももっと変っていただろうと思われる。

当時、冷害凶作などのため、東北農村の疲弊いちじるしく、多くの兵の家計は恵まれなかった。「良兵良民」をモットーとする石原は、貧農救済の具体策として満州移民を奨励し、農法改良を研究させている。このほか、農家の副業奨励のため、連隊でアンゴラ兔を飼い、除隊する兵にそれを与えたり、当時弊害のあった、入営時の餞別に対する除隊みやげの習慣はこれを廃止した。また演習の際に農作物を荒らさないように、突撃前進はあぜ道を縦隊で行うよう將兵を指導するなど他の連隊長には考えもつかないことをどしどし実行していった。

数々のエピソードを生んだ石原の連隊長時代も二カ年で終り、昭和十年八月の異動で参謀本部作戦課長として中央に転出する。

4、参謀本部時代

石原が作戦課長として参謀本部に初出勤した八月十二日は、奇しくも相沢中佐が永田軍務局長を斬殺した日であっ

た。これで永田と石原が相並んで省部の中枢を占めることを待ち望んでいた人びとの夢も遂に破れてしまった。この二人が陸軍の中枢にいて協力したら、その後の日本はどうなっていただろうか。まことに惜しいような気がする。

さて、石原が参謀本部に着任して知ったことは、派閥抗争に明けくれた陸軍首脳部の無策により、かつて均衡が保たれていた極東ソ連軍の兵力と在満日本軍の兵力の比が十対三くらいで日本軍が不利となっていたことであった。石原は陸軍を近代化し、バイカル湖以東のソ連兵力と同等の兵力を大陸に常駐させうる軍備をもつための計画を立てる必要を感じた。そこで満鉄の宮崎正義に依頼して日滿財政経済調査会を創設、「重要産業五ヵ年計画要綱」をつくらせた。この計画はその後、昭和十二年五月に陸軍省の採択するところとなるのであるが、やがて勃発した日華事変のため日の目をみずに葬り去られることになる。石原はまた国防産業政策を推進し、戦争指導と情勢判断を主務とする戦争指導課を参謀本部に設けることを主張、実現するやその初代課長となった。しかし、同課も日華事変の勃発、つづく石原の転出により、次第に形骸化していった。

石原は作戦課長在任中、二・二六事件に遭遇する。満州出張中の作戦部長の代理として、また戒嚴参謀として、終始一貫した方針で、杉山参謀次長ら陸軍上層部を引きずって、事件の解決につくした石原のはたらかきは有名である。

事件中、叛乱軍に対する思惑から何かと戒嚴司令部に干渉した荒木、真崎両大将を馬鹿大将と面罵し、叛乱軍を何とかと有利にしようとする皇道派の動きを封じて、戒嚴令の布告を進言し、大兵力を東京に集中して一挙に解決をはかった手腕はものの見事であったという。しかし、石原は単に軍の統制と秩序の保持をはかろうとするいわゆる統制派の人たちと同じ考えからこの叛乱を否定したのではなかった。相沢中佐の弁護人になろうとしたほど皇道派の主張に理解をもっていた石原が、この事件を利用して国防の充実、国民生活の安定を図ろうと思った時点もあったのではないか、また早々に戒嚴令の発令と大兵力の東京集中を言したことや、二十六日夜、帝国ホテルで橋本欣五郎、皇道派の満井佐吉とひそかに会見したのもこのような考えからだろうという見方をする人もある。

昭和十二年一月広田内閣が倒れ、宇垣に大命が降下する。石原は生産力拡充計画の実現をはかるのに都合のよい林首相、板垣陸相のコンビを想定して、単なる幕僚政治温存を企図する武藤章、片倉衷らと歩調を合わせて宇垣内閣を流産させた。しかし、林内閣は実現したものの、板垣は陸相になれず、石原の信頼する組閣参謀・十河信二も林から離れ、たった四ヵ月で瓦解した。石原は後年、「何のために宇垣の組閣に反対し、林内閣の出現に努力したのかわからない」とその誤りを告白したという。石原の友人横山

臣平は、これを石原の千慮の一失だといっている。

昭和十二年三月石原は少将に進級、参謀本部第一部長（作戦担当）となり、やがて七月に蘆溝橋事件がはじまる。石原の理想とする満州における民族協和も、北方ソ連軍に対する国防の強化も、そのための産業五ヵ年計画も、すべて中国との平和を前提としたものであったから、石原は当然事件の不拡大方針を出した。これに対し、軍中央部の意見は大きく二つに分かれ、陸軍省、参謀本部それぞれ拡大派、不拡大派が入り乱れて連日激論がたたかわされたという。こと戦争においては強硬派、積極派がどうしても勝ちを占めるもの、やがて拡大派は部外の拡大派とも声をそろえ、陸相杉山も次官梅津も、そして近衛首相も抑えきれず、事件は拡大の一途をたどった。石原はなおも事件の解決に努力し、最後の切り札として近衛と蔣介石の会見を提案するが、これも実現せず、戦争は次第に泥沼化し、ついに太平洋戦争に発展することになる。

昭和十二年九月、孤立同然となった石原は追われるようにして、再び満州に転出していった。

5、再び関東軍へ——そして失意の帰国

石原が参謀副長としてもどってってきた関東軍の軍司令官は

植田謙吉、参謀長は東条英機であった。五年ぶりのなつかしい満州であったが、その実情は彼を落胆させるものであった。特に石原が最も警戒していた関東軍の内面指導と日系官吏の横暴がまかり通り、それが住民の満州国政府に対する憤まんとなっていた。石原の考えていた五族協和の王道楽土などその片りんすら見当らず、満州国は文字どおり日本の傀儡国になっていた。かつて満州国民に自治独立を確約した石原は、早速、関東軍は内面指導をやめて、満州国の政治経済は国民にまかせ、その指導権は協和会にゆずるべきだという意見具申を行った。しかし、軍司令官にも参謀長にも無視され、石原は次第に満州国に希望を失ってゆく。

関東軍の内面指導権により、いわゆるニキンスケの星野直樹、岸信介あるいは甘粕正彰らと結んで、満州国の政治に極度の干渉を行っていた東条参謀長と石原がここで対立するようになるのは当然であった。両者の対立は性格的なものもあり、また石原の作戦部長時代からの日華事変の方針についての対立もあったが、ここへきて満州国の内政問題では完全に対立、両者の間柄はきわめて険悪なものとなった。大川周明が満州旅行の途中、関東軍に石原を訪ねた後、参謀長の部屋をきいたとき、「東条上等兵の部屋はそこだよ」と当人にきこえがよしいったという有名な話もこの頃のことである。

やがて東条は陸軍次官となって満州を去り、磯谷廉介が参謀長の後任となった。満州国に対する関東軍の指導方針については磯谷も東条と同じで、前述の石原の意見具申はまたもとりあげられなかった。業を煮やした石原は、自分の意見が採用されなければ現役を退き、丸腰になって満州国のため努力しようと決意し、植田軍司令官に予備役編入願を提出した。植田は、石原が持病に苦しんでいたので、「一まず病氣静養のための休暇で帰国せよ」と予備役編入願をにぎりつぶして説得、石原は十三年八月帰国することとなった。石原帰国の報が伝わり、満州の住民は救世主を失ったように悲しみ、中国人某は「太陽を失った感じだ」となげいたといわれている。

帰国した石原は四ヵ月の病氣療養後、同年十一月舞鶴要塞司令官に補せられ、翌十四年八月中將に進級、京都の第十六師団長に親補された。

師団長になった石原は、連隊長のときと同様、直接兵を指揮できる軍人の天職を得て、非常に喜んだ。そしてまた石原式に訓練演習を第一とし、形式にこだわらぬ改革をどしどし行った。儀式ぎらいの石原が、ある閲兵式で、「形式ばったことは大嫌いだ。長い時間立っている方も迷惑だろう」と馬で一氣に駆けぬけ、一分足らずで式が終わったという話もこの師団長時代のことである。昭和十六年、戦陣訓が東条陸相の名で全陸軍に配布されたとき、「陸軍大臣

は政治に参与するもので、全軍に精神教育をするのはすじ違いだ。軍人への教訓は軍人勅諭だけで十分だ」と批判し、京都師団の將兵にはこれを読ませなかったという。

同年、師団の北滿移駐の内命をうけた石原は非常に喜び、駐屯地を中心に民族協和をはかることなどを考えて着々準備をすすめたが、突如とりやめになった。理由は南方での使用ということであったが、石原師団を満州へ送れば、協和会と提携し、関東軍の満州国指導問題でまたまた波乱の起ることをおそれたためともいわれている。

6、待命、隠棲そして終戦

石原師団長は、望まれて大学はじめ各所で講演を行った。相変らずの毒舌は、泥沼の日華事変の中止を主張し、政府や東条軍政の情勢判断の誤りをこっぴどくたたいた。このため東条との対立はますますひどくなり、東条は陸相の権限で憲兵を使い、石原と東亜連盟に対する弾圧を強めた。そして遂に辞職を要求、十六年三月石原はついに待命、予備役編入となった。しかし、過去すでに三度も予備役編入願を出している石原にとって悔いはなかった。石原のようなやり方で、よく三十年間も現役にとどまれたものと思えるし、またこの天オ的逸材を追いやったことは陸軍

の大損失だだとも思える。なお、石原は現役を去るに當り、その心境を切々と述べた有名な「現役を去るの辞」を知人に配布している。

現役を去った石原は立命館大学に迎えられて国防学の講義を行い、また大学内に国防研究所を開設し、その所長となった。招へいが決ったとき、大学側が給料を尋ねると、「国家から恩給をもらっていますから月給はいりません」と辞退したという。後に立命館における講義録『国防論』を出版したが、東条憲兵により、先に出版した『戦争史大観』とともに絶版に付されてしまった。その年の十二月に太平洋戦争がはじまり、初戦で日本が華々しい戦果をあげていたとき、石原は「この戦争は負けますよ。今のうちこそ景気がよいが、そのうちに旗色が悪くなります。見ていてごらんさい。」と公言してはばからなかった。いかに元中將とはいえ、こんな石原を憲兵や警察がだまっつて野ばなしにするわけはなく、講演会の主催者や大学に次第に圧力を加えるようになった。石原もそれを察知して、一年半で立命館をやめ、十七年九月郷里の鶴岡へ引き上げた。

鶴岡へ帰った石原は、高山樗牛の生家をその住居とした。しかし、ひっそりと晴耕雨読で終るような石原ではなかった。戦局の推移と多難な国家の前途を思うとき、訪問客に対し、また東亜連盟の講演会などで、相変らず毒舌をふるって東条政府を批判した。山形県知事に戦局の見通し

をきかれ、「ご心配には及びません、必ず負けます。負けて目が覚めてから日本は本来の姿を現わします」と答え、空襲のはじまる一年半も前から、「今に東京は焼野原になるぞ」と警告していた。この間、石原は十七年の暮、甘粕正彦のあつ旋により、東京で東条首相と会見している。そのとき、今後の戦争指導について東条から意見をきかれ、「君には戦争指導などとても無理だから、一日も早く総理大臣をやめるべきだ」と答えたという。それは二人にとつて最後の会見であった。

やがて石原の予言どおり惨たんたる敗北の日がきた。東久邇宮内閣は、石原の内閣顧問就任を要請してきたが、石原は健康上の問題と東亜連盟運動に専念することを理由に辞退し、鈴木文史朗と賀川豊彦を推せんした。二十年秋東京に出てきた石原は通信病院に入院して、宿痾の膀胱肉腫の治療をうけた。石原を戦犯にするための取調べのためか、あるいは何か証言を得ようとしてか、極東裁判の各国検事が何人か石原の病床を訪れた。石原が「東京裁判は後世の物笑いだ」とか「世界第一級の戦犯はトルーマンだ」といって彼らを煙にまいたのも、前述の「東条と思想的対立などできるわけがない」といったのもこのときである。彼らは、自分は立派な戦争犯罪人だと公言し、当時の権力者に向つて齒にきぬきせずに堂々といいたいことをいう石原にかえつて好感をもち、裁判終了後帰国の際に、山形県

に石原の病床を訪ねたものもあつたという。

二十一年退院後、酒田市北方、西山地区の吹浦海岸の農場に小さな茅屋をたてて隠棲、病を養うとともに東亜連盟の同志と相語らうのを楽しんだ。翌二十二年五月、石原は酒田によび出された。それは極東軍事裁判が同市に出張して臨時法廷を開き、証人として石原を訊問したときである。西山から布団をのせたリヤカーに身をよこたえながら出廷した石原は、ここでも自分は戦犯だと主張し、辛らつさとニューモアをまじえて完べきな答弁を行って一同を驚かせた。彼がついに戦犯にならずに終つたのは、このときの答弁ではっきり侵略主義者でないことがわかつたからだといわれている。

再び西山に帰つた石原の病は、その後次第に重くなり、終戦四周年の二十四年八月十五日朝、彼の指導をうけた庄内の青年や東亜連盟の同志たちに見守られながら息をひきとつた。まさに巨星落つといった感じであつた。

〈思想と戦争理論〉

石原はその生涯を通じて、軍人ばなれのした数々のエピソードの花を咲かせてきたが、それらはすべて彼の一貫し

たものの考え方による行動の結果であつた。常に彼の頭の中にあつた考え方のうち、いくつかめぼしいものをひろつて述べてみよう。もちろん、それぞれはお互に相関連し、共通の基盤に立つたものであるが。

1、軍隊教育及び兵に対する考え方

石原は性来、弱者、貧者、身分の低い者、部下、使用人、女子供などをやさしくいたわる傾向があつた。これは同じ秀才軍人といわれた辻政信などとは大ちがいで、石原が軍隊内では兵に、満州では現地の住民に、現役をやめてからは郷里の人びとに非常にしたわれた理由の一つである。特に軍隊内で最下層の兵を大事にしたことは、前にのべた連隊長時代の数々の逸話がそれを物語っている。石原は青年将校時代から、一身をかえりみず君国のためにすべてを捧げる兵の精神は神に通ずるものだと考え、この兵に、いかにして精神の原動力となるべき国体に関する信念、感激をたたき込むかということが、軍隊教育、特にその精神教育の第一義だと考えていた。そのため石原の頭の中には常に兵とともに、兵のためにということしかなく、隊付時代は兵の起床時（午前六時）に出動し、消灯ラッパ（午後九時）後に下宿に帰つたほどであつた。その愛情あ

ふれる訓練教育により、石原の中隊の成績は常に連隊隨一、石原の連隊のそれは師団隨一だったという。

2、東亞連盟の思想

石原の中国に対する考え方は、地方幼年学校時代に、同期生南部襄吉の父で中国通の思想家南部次郎から影響をうけたという。そして早くから、日本国防の基礎は東亞民族の提携にあり、そのためには日中両民族は協調しなければならぬと考えていた。満州に民族協和による新しい独立国家をつくり、そこに道義による東亞の大同団結を現出し、ようという石原の考えが東亞連盟思想の起源であった。同連盟の構想として、次のような大原則が定められた。すなわち、

- 一、国防 白人の侵略に対して東亞の天地を守る。このために満州国を必要とする。
- 二、政治 日中満は各々その国の特徴によつて政治は独立し、内政に干渉しない。
- 三、経済 共存共栄を目的として、その一体化をはかる。

四、文化 日中両国が互にその文化を尊重し、道義を中心とする東洋新文化を創造し、更に西洋文化

をも総合して人類最高の文明を完成する。

この思想は昭和八年、満州国協和会によつて採用され、陸軍の中央部もこれをみとめた。しかし、その後、満州国内の情勢の変化により、現地では次第に運動がしにくくなり、協和会東京事務所が運動の中心となつてゆく。だが、それも昭和十三年以降は憲兵が目をつけるようになり、更に日華事變の解決の遅延とともに、この運動に関心が高まると、東条陸相は弾圧の手を加えるようになった。昭和十六年予備役に入つた石原が、先に木村武雄（元自民党代議士）によつて創設された東亞連盟協会の顧問となるや、同協会の会員は東北の農村を中心にいちぢるしく増加していった。終戦後、打ちひしがれた会員たちを激励し、食糧増産にまい進したが、二十一年協会は占領軍によつて解散させられてしまった。

3、戦争史観と世界最終戦論

士官学校在学中から世界戦史に興味をもつてその研究を行つていた石原は、ドイツ留学中は、特にフリードリッヒ大王とナポレオンの戦史の研究に没頭した。そして、戦争には持久戦争と決戦戦争の二大傾向があつて、それが交互にくりかえされたこと、また戦闘隊形が点から線へ、線か

ら面へと発展してきたことを究明し、これに彼独自の見解を加味して世界最終戦論に到達した。その論旨は大まかにいって次のようなものである。すなわち、「戦争の形態が極限に達したとき、それが最終戦争となる。戦術の変化として従来、点から線へ、線から面へと変化してきたが、次は体の戦争となる。それは老若男女、国力の全部が参加して戦う決戦戦争で、それが最終戦争となり、やがて世界は一つとなる」というものである。そして、彼はその前提として、もう一つ前の準決勝戦を想定し、「そこに残ることができるものは、東亜民族の代表日本であり、他はソビエト圏、アメリカ圏およびヨーロッパ圏とし、準決勝を勝ち抜いたものが歴史上かつてみない残酷な兵器を使用する大戦争を行い、その後はじめて世界が一つになる」といい、その時期は第一次大戦から五十年後、決勝戦は東洋の王道と西欧の覇道の対立となるだろうと予言している。

しかし、実際には日本は準決勝戦で敗れたことになり、これについて戦後石原は、「これははなはだしいぬぼれと誤りであった」と訂正している。

以上のべてきた石原のものの考え方は、たしかにその天才的な頭脳から生み出されたものであるが、その基盤には天皇崇拜、日本中心という軍人的な考え方と日蓮信仰とがあった。石原は「天皇が東亜諸民族から盟主と仰がれる日

は、すなわち東亜連盟が真に完成した日である」といい、また「天皇一人が全アジア民族を指導さるべきもので、軍隊にたとえると、天皇は総司令官であり、日本はその下の近衛師団で、中国は第一師団、満州は第二師団、朝鮮は第三師団だ」といっているように、東亜連盟の王道的な考え方の中心に天皇をおいている。そもそも他国の領土満州で戦争を起し、そこに独立国をつくって北方ソ連からの防波堤にしようという考えは、やはり日本中心の軍人的な発想といわざるを得ない。また、近い将来における兵器の異常な発達や核戦争さえ予想した世界最終戦論にしても、その判断は日蓮上人の遺教と一致するといっているように、宗教的、非科学的な一面をもつものであった。

大宅壮一は、日本的右翼の要素として、天皇信仰、日蓮宗、大陸への憧憬、重農主義などをあげ、それらをマキシマムに近い形で身につけていたのが石原だといっているが、まさに石原の思想、理論の特徴と限界をついたものといえよう。

《文献の紹介》

1、石原の著書・論文・証言等

○石原莞爾「戦争史大観」 中央公論社 昭和十六年

(771—179)

東亜連盟の同志高木清寿の要請により、現役最後の思い出として発行した。持久戦争と決戦戦争、戦闘方法の変遷、将来戦争の予想といくつかの章に分けて、自身の戦争史観を解説し、最後に現在における日本の国防について論述している。

なお、刊行後「国防論」とともに東条政府の弾圧で絶版に付せられた。

○石原莞爾「東亜連盟協会運動要領解説」 東亜連盟協会

昭和十六年 (319, 122—1569f)

昭和十六年十月の協会中央参与会員第二回全国会議における石原顧問の講演速記録であるが、その中で協会と大政翼賛会との関係について石原の意見を述べている。

○石原莞爾「国防政治論」 聖紀書房 昭和十七年

(390, 4—1569f)

当時の客観的諸情勢に規制され、第一章第三節の全部、第二章第三節の一部などを削除せざるを得なかったと「あとがき」でことわっている。日華事変の解決などに関する石原の毒舌もやわらげられ、あたりさわりのないよう配慮が加えられている。

○「石原莞爾資料」 角田順編 全二冊 原書房 昭和四

十二—四十三年 (明治百年叢書) (GB611—13)

石原の遺稿の中から、軍人としての活動にわたる部分を「国防論策」と「戦争史論」の二冊に分けて刊行したものである。前書は関東軍参謀時代から予備役時代までの日記、訓示、意見、指示、書翰等、相当細かいものまで網らしたもので、巻末にある編者の解題「石原の軍事的構想とその運命」は、時代区分を本文と対応させて書かれており、本文利用の手引となるものである。後書は石原が陸大兵学教官時代に使用した講義録を中心としたいわゆる石原戦史を収録したもので、巻末に実弟石原六郎の「兄の憶い出—陸大教官のころ」と稲葉正夫元参謀の解題「石原戦史と石原構想」がある。

石原の軍人としての活動に直接関連のある資料（したがって最終戦争理論や東亜連盟関係などは除かれている）だけであるが、その限りでは最も網らかつ信頼できる、石原研究の基本的資料といわれるものである。

○石原訊問書（「極東国際軍事裁判速記録」第五卷第二

六号 雄松堂書店 昭和四十三年 A191—16に収録）

昭和二十二年五月十四日法廷でよみ上げられた酒田市における嘱託訊問の記録である。石原は、満州事変前の情勢、事変当時の関東軍の作戦準備、作戦準備と部外者との

関係、事変の突発と軍司令官の決心部署および中央の処理方策と関東軍の行動との関係の五項目についてその意見を述べている。

○石原莞爾「最終戦争論」 経済往来社 昭和四十七年

(A651-43)

「戦争が人類の前に立ちほだかる現在、石原の戦争史観と政策を検討する必要がある」という意図で刊行された本書は、石原の最終戦争論とそれにもとづく軍備建設策から武装放棄論にいたる思索の過程を通観できるよう彼の関係論文を編成収録したものである。巻末に実弟石原六根の「石原莞爾の思想と人」が付されている。

○「石原莞爾全集」 第一巻〜第七巻、別冊 石原莞爾全集刊行会編・刊 昭和五十一〜五十二年 (US21-64)

この全集の刊行の構想によれば、本巻十六巻と補巻とに分け、本巻は、戦争史観、戦史研究、理論から実践への発展の成果、仏教に関する著述・談話、フランス革命を中心とした石原の監修本などを柱に大別し、補巻は、「石原莞爾と大正・昭和」と「石原莞爾をめぐる人々と断章」の二部に分けて、それぞれ刊行することになっている。すでに本巻の第一巻から第七巻までと別巻(東亜連盟運動)が刊行された。

完成すれば、最も網羅的な石原の著作集となり、前記「石原莞爾資料」とあわせて、石原研究に欠かせない資料となるものと期待されている。

2、伝記・評伝・解説書等

○西郷鋼作「石原莞爾」 橋書店 昭和十二年

(720-153)

著者は戦前のジャーナリストで、協和会に近い立場の人と思われる。荒木大将の竹やり戦術を批判するなど石原の戦争観をかなりそのまま書くことができたのは、また軍の検閲がそれほどきびしくなかったからであろう。満州事変についての石原の談話では、当時の石原の立場が少しぼかされている。著者は田村真作という別名で中央公論(昭和十二年四月号)に「石原莞爾の全貌」という一文を書いているが、内容は本書とほとんど変わらない。

なお、戦前刊行の伝記として、菅原節雄の「板垣征四郎と石原莞爾」(今日の話題社 昭和十二年)があるが、当館にはなく、岩手県立図書館が所蔵している。

○「石原莞爾研究」 第一集 精華会中央事務局 昭和二十五年 (GK62-18)

石原の一周忌に、里見岸雄、南部襄吉、山口重次ら東亜連盟、陸軍、満州あるいは日蓮宗関係の友人・同志二十五人の文章を集めて刊行したもので、冒頭に大正九年日蓮宗に入信間もない石原が、駐屯地漢口から夫人にあてた書簡二通が収載されている。なお第二集以降は刊行されたかどうか不明である。

○山口重次「悲劇の將軍石原莞爾」 世界社 昭和二十七年 (289.1—1569Y1)

著者は、満州事変前から関東軍を鞭撻、激励し、事変勃発後は軍をバックアップした満州青年連盟という民間団体の大黒柱で、石原とは新国家のあり方で共鳴、よくその片腕となった人である。したがってこの書は石原の生涯を描いてはいるが、特に満州時代の石原の行動の描写は詳細である。

無味乾燥をさけて読みもの風としたのは、石原の動く姿や真意をさながらに再現したいという意図からだと言者は述べている。

○榊山潤「石原莞爾」 湊書房 昭和二十七年

(913.6—Sa425i)

○榊山潤「小説石原莞爾」 元々社 昭和二十九年

(913.6—Sa425i—g)

昭和十二年関東軍参謀副長として再び満州に渡り、自分の夢とあまりにもかけはなれたこの新国家の実情をみて、改革をはかるが、孤軍奮闘でどうにもならない失意の石原の姿を、新聞記者と石原の書生兼秘書の二人の青年の目を通して描いた小説である。小説とはいえ、石原の満州国観とこの時期の彼の言動がくわしく書かれており、巻末に石原の略歴と「現役を去るの辞」全文が掲載されている。

○高木清寿「東亜の父石原莞爾」 錦水書院 昭和二十九年 (289.1—1569T1)

著者は元報知新聞記者で石原の思想に共鳴、協和会および東亜連盟運動でその片腕となって活躍した人である。したがって本書は東亜連盟の見地から石原の生涯・行動を記述しており、満州事変以降の軍首脳、特に東条英機を満州破壊の元凶と弾劾している。

○藤本治毅「人間石原莞爾」 太千産業社 昭和三十四年 (289.1—1569Hn)

著者は陸士三十四期の元憲兵大佐、石原が仙台の歩兵第四連隊長の頃、同地に勤務していた人である。後に石原に私淑し、毀誉褒貶、真に石原を知るものの少ないのをなげいて、この書を著したという。軍人の立場から、石原の軍歴を追いながら、その兵学上の主張や世界観、軍隊におけ

る逸話などを紹介している。

○藤原彰「石原莞爾」(日本人物史大系 第七卷近代Ⅲ 井上清編 朝倉書店 昭和三十五年 210.1—216912 収録)

昭和政治史上における石原の行動にスポットをあてたもので、満州事変と二・二六事件におけるその役割、作戦家としての手腕、戦略・戦術家としての考え方などを論じ、最後に石原は自我の強さとその理想主義により、陸軍首脳部や幕僚連中と相いれなくなり、次第に軍中央部から遠ざけられたと結んでいる。

○犬養健「石原莞爾小伝」(犬養健「揚子江は今も流れている」 文芸春秋新社 昭和三十五年 210.74—1486y 収録)

著者が昭和十四・五年頃、近衛内閣の参与官として南京陥落直後の上海を視察した当時の日中両国首脳の動きを描いた著作の巻末に付された小伝の一つである。

日華事変の背景を説明するためにと、この観点から、満州国構想への石原自身の幻滅、事変不拡大工作の失敗等に焦点をあてた数ページの小伝で、石原を評して「天才的人間のもつ魅力と欠点をさらけ出して、慧星のように消えていった人物」といっている。

○大宅壮一「石原莞爾と満州建国」(中央公論 昭和四十年八月号 233—9 収録)

前述の中央公論八十年記念特集「近代日本を創った一人」の軍人編に出てくるもので、著者は、満州事変の演出者として、また宗教的理想主義者としての石原の特異性を強調、最後に人間石原は軍人よりもむしろ僧侶や求道者に近く、その本質は詩人であるといっている。

○石川正敏「最終戦争は回避できるか——石原莞爾の予言と思想」(佼成出版社 昭和四十一年 (390.1—156915))
著者は山形新聞の元論説委員、雑誌「東亜連盟」に執筆、石原思想に傾倒していった人で、ユニークな石原研究者といわれている。本書は現代文明の性格と本質を描き、いかにして真の世界平和を招来できるかということの具体的方法を石原思想の解明によって明らかにしようとする文明論である。

○成沢米三「石原莞爾」 経済往来社 昭和四十四年

(GK62—2)

○成沢米三「人間石原莞爾」 経済往来社 昭和五十二年

(GK62—25)

小・中学校長や鶴岡市立図書館長などをつとめた著者が、人類最大の課題はこの世から戦争をなくして世界恒久

平和を確立することで、そのためには郷土の先輩石原の思想がきわめて適切な示唆と指針を与えるものと考えて、石原の生涯、永久平和論、東亜連盟思想などを紹介したものである。

なお、この二冊はタイトルと「あとがき」が異なるだけで内容は全く同じである。

○木村武雄「ナポレオン・レーニン・石原莞爾——近世史上の三大革命家」講談社 昭和四十六年（GK11—8）

○木村武雄「石原莞爾」土屋書店 昭和五十四年（GK62—36）

著者は元自民党代議士で、昭和十四年東亜連盟協会を創設した人である。したがって、本書は東亜連盟の立場から論述された石原の伝記といえよう。石原の思想が満州国においても、国内においても、十分政策化されなかったことを残念に思い、それを妨げた東条、磯谷らに対する憤まんと後に石原から離れていった板垣に対する失望の念があらわれている。

なお、後書は前書の石原莞爾の部分だけを別冊として再刊したもので、内容は全く同じである。

○白戸みどり「最終戦争時代論——石原莞爾の思想」邦文社 昭和四十六年（A651—37）

著者は晩年の石原の枕辺にあって、遺稿「日蓮教入門」の推敲などを手伝った哲学者である。本書は、石原の持つ宗教と科学の二つの要素とその接点の解明を基調としながら、戦争肯定から戦争否定への移行と最終戦争回避の方策を検討し、また石原の構成した次代文化の内容などにもふれている。

○横山臣平「秘録石原莞爾」芙蓉書房 昭和四十六年（GK62—7）

地方幼年学校から陸大までの同期生の書いた伝記である。したがって、特に青年将校時代までの石原の行動や考え方については非常にくわしくかつ正確に描写されている。しばしば他と協調できなかつた石原の性格、石原の戦争理論の非科学性などを思い切って批判はしているが、やはり友人らしく、そんな欠点のあったことを惜しむ気持があふれている。

○岡田益吉「石原莞爾とその思想」(平泉澄監修「歴史残花」四 時事通信社 昭和四十六年 210.04—P182に収録)

著者は読売、東京日日、河北新報の記者として活躍、その間満州国情報科長をつとめた人である。本論は、石原の幼年学校時代から終戦後までの生涯を簡潔に描いた伝記で

あるが、特にその思想の形成期における南部次郎の影響と満州時代に重点がおかれ、ややくわしく述べられている。

○青江舜二郎「石原莞爾」 読売新聞社 昭和四十八年

(GK62-16)

著者は劇作家であるが、応召して中国大陸に転戦した経験から、以前に「大日本宣撫官」を書いた。その宣撫官たちの「中国がよくなるためなら、自分は喜んで生命を投げ出す」という心境が石原のそれに通ずるものありとし、また戦中満州で石原の息のかかった人びとに接したことなどがこの書を書く一つのきっかけとなったようだ。

本書は石原の生涯と思想に日蓮宗が及ぼした影響にかなり重点をおいている。すなわち石原の生涯の各時点における宗教とのかかわり合いを論ずるために、法華経を仏教成立史の観点からくわしく究明するなど、他の伝記にみられない特色を持っている。

○杉森久英「夕陽將軍——小説・石原莞爾」 昭和五十二年 (KH566-149)

著者は以前に辻政信の伝記小説を書いた頃から、辻と石原の間に、人間としても軍人としても非常に似かよった面とちがった面があり、その似方とちがいがそのまま日本の近代史において果した軍人の役割・功罪をはっきりさせ

るだろうと考えて、本書にとりかかったという。石原の伝記小説だが、満州時代の動向がその大半を占めている。

○平岡正明「石原莞爾試論」 白川書院 一九七七年

(GK62-35)

著者はジャズ評論家で竹中芳に近い思想を持ち、東アジア反日武装戦線事件に連座した人である。本書は世界赤軍をもって人類の最終戦争期に入るという革命論の新鮮な対立者として石原をとりあげ、世界戦略のプランナーとして満州国をつくった、その理論と実行力を究明している。観点が観点だけに、きわめてユニークな石原研究の著作といえる。

○伊東六十次郎「石原莞爾と戦争学——永久平和実現への提唱」 大湊書房 昭和五十三年 (A651-106)

本書は、鶴岡で石原に接しながら、東亜連盟の機関誌に戦争学の研究を発表していた著者が、日露戦争史観から世界最終戦論にいたる石原戦争学を紹介しながら、それについての自分の研究をまとめたものである。

○宮本忠孝「人間・石原莞爾片々録」 麴町企画 昭和五

十三年 (GK62-33)

元陸軍軍医で、石原とは十七年のかかわり合いをもった

著者が、連隊長時代の石原の日記を医学的見地から解説し、また石原の病歴と死の前後について医者らしい筆致でまとめたものである。なお、「石原語録」として数々のエピソードをのせている。

○大森光章「集団を焼やした参謀たちの演出」 中経出版
昭和五十三年 (GK11-37)

著者は作家で、古今東西の参謀を「無欲」「勉勵型」「信義に生きた」「凝視する」の四つのタイプに分類し、石原を秋山真之、辻政信とともに「勉勵型」に入れて論じている。石原の満州建国の夢は純粋な宗教観から生れたものではなく、あくまで国防政策の実践にすぎなかったといい、その夢が石原の考えていたようにはみならず、現実が全く別の方向に進んでしまったその経過を描いている。

○杉森久英「石原莞爾と辻政信」(プレジデント 一九七九年四月号 24-110 に収録)

満州事変の演出者としての石原、一万余の関東軍の兵力で二十二万の張学良軍を駆逐した作戦家としての石原に焦点をあてて論じ、他国の領土に実験国家をつくる権利があるかのように錯覚し、軍隊を自分の夢の実現に使えるところにその甘さを批判している。

しかし、石原の人間性、人格的魅力については、辻政信

と比べながら高く評価している。

《あとがき》

波瀾万丈とまではゆかないが、かなり起伏の多い人生を生き、その天才的頭脳で独自の理論をつくり上げた石原の全貌は、そう簡単に紹介しうるものではない。まして浅学の筆者は、ただ上べだけをそっとお見せするよりほかなかった。この小論、皮相な見方だとのそしりは免れまい。ただ、未知の人を石原に近づける一助となればと思う。

軍人でありながら、これほど関係する文献の多い人もめづらしい。昭和の軍事史、とりわけ満州事変や軍閥の興亡をあつかった資料で、石原の名前の出てこないものはなからう。したがって、ここでは石原にふれたそのような数多くの文献のうち、石原自身の手になるものと石原個人をあつかったもので、当館で利用できるものに限り、タイトル末尾に請求番号を付して簡単に紹介することとした。しかし、一、二を除いて雑誌の論文にはふれていないし、まだまだ筆者未知の資料も多いと思われる。この文献紹介が石原研究入門の参考ともなれば幸である。

(たなか・あずさ 連絡部司書監)